

東日本大震災で巨大津波が押し寄せた宮城県石巻市の海岸線には、防潮堤などの人工物が陣取っています。一帯には盛り土整備された漁港、工業地帯、復興ニュータウン＝写真＝などが造成されました。開発中は工事車両が行き交って活気があるように見えました。今では静寂が広がり、建物の真新しさばかり目

まだまだ

東北 復興日記



▶▶▶ 201



ソーシャルアカデミー
寺子屋 事務局長

太田美智子さん



心の復興は置いてきぼり

につきます。

避難所から仮設住宅を経て復興公営住宅へと何度も引越し、その都度新たな人間関係をつくりなおさなければなりませんでした。震災から五年以上が過ぎましたが「今が一番つらい」と口にする年配の女性がいます。「眠くて眠くて」と疲労感を訴える方も。復興公営住宅に入ってから出が減っているようにみえます。私自身も季節感を失っていました。飛来するハクチヨウを見て「冬が近い」と思える感覚がようやく戻ってきました。

震災から三年目を迎えた

ころ、毎日十五分ほど泣いていました。心の動揺をどう処理したらいいのか、不安が押し寄せました。そのうち嗚咽も伴い始めました。一人でいる時に、急に始まります。周りに人がいても泣きじやくるようになりました。突然訪れる状態に、周りだけでなく私自身も戸惑いましてた。

今、気掛かりなのは住民同士に生じた溝のこと。例えば防潮堤建設を認めるかどうかなど、復興まちづくりのあり方を巡って意見が割れたりすると、対立の構図がしこりとなつて残っているように感じられます。復興事業は着々と進みますが、心の復興は置いてきぼり。平時の感覚に戻るには時間がかかりそうです。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。